
9世紀のある聖人伝テキストの布置

——アインハルト『聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物奉遷』——

ミシェル・ソー

〈パリ・ソルボンヌ大学〉

西洋中世初期における叙述テキストの布置に関する問題は、第一に歴史叙述のジャンルに目を向けさせます。しばしば『フランク史』とも呼ばれる6世紀末のトゥールのグレゴリウスの『歴史十書』、8世紀初頭に尊師ベアダによって書かれた『イングランド教会史』、そして8世紀末に書かれたパウルス・ディアコヌスの『ランゴバルド史』のような重要な歴史書が書かれました¹。9世紀、一つの歴史叙述のジャンルが特に重要なものとなります。それは「年代記」で、宮廷や大修道院において作成され、毎年重要な出来事を記録していて、確実な年代決定を可能にしてくれるものです²。歴史叙述には聖人に関する記述、聖人伝が密接に結びついています。われわれが歴史を書く人、すなわち歴史家と考える教養人はみな同時に聖人伝作者でもありました。聖人伝文学の主なジャンルに聖人の「伝記」がありますが、これは生前の行動や奇蹟、模範的な臨終の場面や死後の奇蹟によってその人物の聖性を明示するために編まれたものです³。

聖人信仰においてその聖遺物、すなわち遺体の一部は主要な役割を担っていました⁴。当時の人々にとって聖人の遺体との近さ、さらには物理的な接触は聖人自身との直接的な交流として考えられ、そこにおいて聖人は現世から離れて以降も神の御許において生者のためにとりなしを図るのだと考えられていました。神から奇蹟をもたらされるのは聖人その人であり、その奇蹟が神の御許における聖人のとりなしの明白な表れだったのです。このことから、聖遺物をたずねる巡礼の重要性が生まれ、同時に崇敬の中心地となるべき場所へと聖遺物を運ぶ重要性が出てきます。こうした聖遺物の移動とそれに伴って起こる様々な奇蹟が、ラテ

- 1 Grégoire de Tours, *Historiarum libri decem*, B. Krusch et W. Levison éd., *Monumenta germaniae historica (MGH), Scriptores rerum merovingicarum*, vol. I, 1, Hanovre, 1937–1951, rééd. 1962. 仏語訳 : Grégoire de Tours, *Histoire des Francs*, R. Latouche trad. (Les classiques de l'histoire de France au Moyen Age, 27 et 28), Paris, 1963–1965. 英語訳 : Gregory of Tours, *History of the Franks*, L. Thorpe trad., Penguin classics, 1974. Bède, *Ecclesiastical History of the English People*, édition et traduction anglaise B. Colgrave et R. A. B. Minors, Oxford, 1969. 仏語訳 : Bède le vénérable, *Histoire ecclésiastique du peuple anglais*, Olivier Szerwiniak et alii, Paris, 2004. Paul Diacre, *Historia Langobardorum*, *Monumenta germaniae historica (MGH), Scriptores rerum Langobardicorum...*, Hanovre, 1878. 仏語訳 : Paul Diacre, *Histoire des Lombards*, F. Bougard trad., Turnhout 1994. 英語訳 : *History of the Langobards by Paul the Deacon*, E. Peters éd. et W. D. Foulke trad., Philadelphia, 1974². これらの歴史について : W. Goffart, *The Narrators of barbarian History (A.D. 550–800)*, Princeton, 1988.
- 2 M. McCormick, *Les Annales du Haut Moyen Age*, (Typologie des sources du Moyen Age occidental, fasc. 14), Turnhout, 1975.
- 3 聖人伝については以下を参照 : R. Aigrain, *L'hagiographie. Ses sources, ses méthodes, son histoire*, Paris, 1953. H. Delehaye, *Cinq leçons sur la méthode hagiographique* (Subsidia hagiographica 21), Bruxelles, 1934. M. de Certeau, *L'écriture de l'histoire*, chap 7, « L'édification hagiographique », Paris, 1975, p. 274–290 の解説は刺激的である。方法論の案内 : J. Dubois et J.-L. Lemaître, *Sources et méthodes de l'hagiographie médiévale*, Paris, 1993. 優れた入門書 : A. Wagner dir., *Les saints et l'histoire. Sources hagiographiques du haut Moyen Age*, Paris, 2004.
- 4 聖遺物崇敬に関しては特に以下を参照 : H. Leclercq, « Reliques et reliquaires », dans *Dictionnaire d'archéologie chrétienne et de liturgie*, vol. XIV/2 (1948), col. 2695–2699. B. Kötting, *Der frühkristliche Reliquienkult und die Bestattung im Kirchengebäude*, Köln-Oplanden, 1965. *Les reliques, objets, cultes, symboles*, E. Bozoky et A.-M. Helvetius dir. Turnhout-Belgium, 1999. また法学的研究としては N. Hermann-Mascard, *Les reliques des saints. Formation coutumière d'un droit*, Paris, 1975 を見よ。

ン語で「奉遷記 *Translatio*」と呼ばれる聖人伝文学のジャンルの一つにおいて描かれました⁵。われわれはここで『聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物奉遷』⁶について検討していきますが、彼らは287年ディオクレティアヌス帝の治世にローマで殉教しました。この作品は830年末にアインハルトによって完成されたものです。シャルルマーニュとルイ敬虔帝の宮廷に仕えたこの偉大な知識人はとりわけ歴史家として、『シャルルマーニュ伝』⁷の作者として名を馳せています。これは中世のラテン文学で最も有名な作品の一つであり、われわれにとって大帝に関する主要な史料でもあります。その一方、同時代の多くの他の知識人と同様彼もまた聖人伝作者でもあったのですが、彼の作品のこうした側面に関しては研究があまり進んでいません⁸。

通例参照される版、ゲオルグ・ヴァイツによる *Monumenta germaniae historica* 版（1887年）において『聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物奉遷』は四書に分けられています。第一書ではいかにしてアインハルトが殉教者の聖遺物を探しに使者をローマへと送ることになったか、そしていかにして聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物が827年に帝国の中心にまで、すなわち今日のドイツのメイン川流域にある、皇帝によって与えられた彼の所領まで持ち帰られたのかについて語られています。第二書では道中聖遺物の一部が盗まれてソワソンのサン・メダール修道院へと持ち去られてしまい、その修道院長であり宮廷礼拝堂付き司祭長、また帝国の文書局長でもあったヒルドゥイヌスがアーヘンの宮廷礼拝堂にてアインハルトにこれらを返還し、最終的にこれらの聖遺物がメイン川流域のミヒャエルスベルク、次いで後にゼーリングンシュタットと呼ばれることになるミュールハイムという地にて聖遺物の元ある姿へと戻ったことが分かります。この最初の二書が本来の意味での奉遷記 *Translatio* を構成しています。第三書はゼーリングンシュタットにおいて聖遺物の周囲で起きた幾つもの奇蹟について描いており、第四書でも同様にそれらの聖遺物の周囲で起きた奇蹟について扱っていますが、アーヘンまでの道中、そしてアインハルトが一時的に聖遺物を貸した幾つかの修道院、またゼーリングンシュタットにて聖ヘルメスのそれを含むローマの聖遺物がそれらの聖遺物と一緒にあってから起きた奇蹟について描いています。この後半の二書は聖人伝、奉遷記と並んで聖人伝文学の三大ジャンルを成す『奇蹟集』にもなっています⁹。

G. ヴァイツの版は主に二つの写本から校訂されたものです。一方は10世紀の写本でメスのサン・タルヌール修道院由来のもの（Metz, Bibliothèque municipale, E 99）で第二次世界大戦の際に失われ、もう一方は9～10世紀に比定される写本でフルリー修道院由来のもの（*Vaticanus Reg. lat.* 318）です。いずれもオリジナルの写本ではありません。また底本となるこの二つの写本において、テキストの分割が全く同じようになされているわけではありません。メスの写本は写本制作者によって四書に分けられており、編者がこの区分を採

5 M. Heinzmann, *Translationenberichte und andere Quellen des Reliquienkultes* (Typologie des sources du Moyen Age occidental, 33), Turnhout-Belgium, 1979. Id., « *Translatio* (von Reliquien) », *Lexikon des Mittelalters*, 8, 1996, p. 947-949.

6 以下の形で刊行されている。 *Translatio et miracula sanctorum Marcellini et Petri auctore Einhardo*, par G. Waitz, *Monumenta germaniae historica, Scriptorum*, XV/1, Hannover, 1887, p. 238-284. 今後の引用は *Translatio*... から行う。仏語訳版は A. Teulet, *Œuvres complètes d'Eginhard*, 2 vol., (Société de l'histoire de France) Paris 1840, II, p. 176-396. 英語訳版は P. E. Dutton, *Charlemagne's Courtier ; The complete Eginhard*, Peterborough, Ont., 1998, p. 69-130.

7 *Einhardi Vita Karoli, Scriptores rerum germanicarum ad usum scholarum*, G. Waitz et O. Holder-Egger éd., Hanovre 1911, réimp. 1965. 最新の翻訳 : Einhard and Notker the Stammerer, *Two Lives of Charlemagne*, D. Ganz trad., Penguin classics, 2008.

8 先駆的な研究 : M. Bandois, *La translation des saints Marcellin et Pierre. Etude sur Einhard et sa vie politique de 827 à 834* (Bibliothèque de l'Ecole des hautes études 160), Paris, 1907. より近年のもの : M. Heinzmann, « Einhard *Translatio Marcellini et Petri* : Eine hagiographische reformschrift von 830 », dans H. Schefers éd., *Einhard, Studien zu Leben und Werk, dem Gedenken an Helmut Beumann gewidmet*, (Hessische Historische Kommission), Darmstadt, 1997, p. 269-298. 最近の研究として J. M. H. Smith, « Einhard the sinner and the saints », *Transactions of the Royal Historical Society*, ser. 6, 13, 2003, p. 55-77. *Ead.*, « Emending evil ways and praising God's omnipotence : Einhard and the use of roman martyrs », dans K. Mills et A. Grafton dir., *Conversion in the late Antiquity and the early Middle Ages : Seeing and Believing*, (Studies in Comparative history), Rochester, N.Y., 2003, p. 189-223.

9 M. Heinzmann, « Une source de base de la littérature hagiographique latine : le recueil de miracles », *Hagiographie, Cultures et Sociétés (IV^e-XII^e s.)*, Paris, 1981, p. 235-257.

用したのは正当に思われます。ヴァチカンの写本は三書しかなく、写本伝来がテキストの布置に関し一貫していなかったことを示しています。近代の編者は、17世紀にポランドイストの『聖人列伝 Acta Sanctorum』によって確立された十書の構成をしばしば採用しました。この区分は19世紀半ばのアレクサンドル・トゥーレのフランス語対訳版においても踏襲されています¹⁰。

われわれがここで考察しようとするのは、『聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物奉遷』のテキスト布置についてです。その全体的な構成や序文、部分への指示、また同時に情報源の言及という形で作者の介入について検討することで、一つあるいは幾つかの目標--それを引き出すよう努めます--のためにアインハルトがどのようにこのテキストを形作ったかを明確にしようと思います。この『聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物奉遷』にいかなる意味を見出すことができるのでしょうか。

われわれはアインハルトの四書のテキストを順次検討していきます。各書の最初と最後については、「n書の始まり incipit liber n.」、「n書の終わり explicit liber n.」のようにはっきりと明示されています。四書の前に置かれた献辞と全体の序文において、著者は自身について語り、また彼の意図を説明しています。

献辞と序文

「神と我らが主イエス・キリストの真なる信奉者、そして心から聖人を愛する者たちへ。罪人たるアインハルト」¹¹。献辞において、著者は悔悛者を自称しています。彼は、第一に神、そして第二に聖人たちに信仰する人々に宛てて書いています。よき神学的作品とはそうあるべきでした。次に彼は、それらの話を模範とし、彼のように罪人であるような人々に自省を促すために、聖なる教えに従った人々の生涯と功績を「文字と記憶に託した」先人たちについて言及しています。彼らは隣人愛の名のもとにこれを行ったのに対して、アインハルトは信者の生活や素行を正そうとする意志のもとで、「読者の魂を創造主の賞讃のうちに高みにあげるために」¹²この本を書こうと思い立ったのです。

彼はこの本に対しひとつの定義を与えていますが、これを題名と考えることができるでしょう。「キリストの聖なる殉教者マルケリヌスとペトルスの遺体の奉遷について、また神がキリスト教徒の救済のためになすことを望まれたそれらの聖遺物による徴と奇蹟について」¹³。ここから、この作品の大きな二つの主題が予告されています。すなわち一方は奉遷（一、二書）、他方は奇蹟（三、四書）です。第一書と第二書が序文を持たないのに対し、第三書と第四書には序文があることに注目しておきましょう。このことは本来の意味での奉遷の物語と奇蹟集との間に一定の隔たりがあることを示しています。

第一書

第一書ではなぜアインハルトが殉教者の聖遺物を必要としたか、いかにして彼がローマにてそれらを探させたか、そしていかにしてそれらが彼の所領、マイン川沿いのミヒャエルスベルク（フランクフルト近郊、現在のドイツ）へと持ち込まれたかについて語られています。アーヘンの宮廷からローマへ、ローマからミヒャエルスベルクへの旅人の道のり、あるいはローマで訪れた聖地の場所であれ、テキストにおける地理や

10 Heinzlmann, p. 273–277 ; Bondonio, p. 23.

11 *Translatio...*, p. 239, 19–20 : *Veris veri Dei cultoribus et Ihesu Christi Domini Nostris sanctorumque eius non fictis amatoribus, Einhardus peccator.*

12 矯正 *correctio* と改善 *emendatio* を目指すカロリング期の政治において、アインハルトとこのテキストが果たした役割については、J. H. M. Smith, « Emending Evil... » (注8).

13 *Ibid.*, *Praef.*, 28–30 : [...] *libri, quos de translatione corporum beatorum Christi martyrum Marcellini et Petri signisque ac virtutibus, quae per eos Dominus ad salutem credentium fieri voluit, qua potui facultate conscripsi [...]* デウスドナと聖遺物の窃盗一般については P. Geary, *Furta sacra. Thefts of Relics in the Central Middle Ages*, Princeton, 1990, 仏語訳 : *Les vols de reliques au Moyen Age*, Paris, 1993, デウスドナに関する部分は p. 76–80.

地誌的記述の正確さを強く印象づけられます。

その最初の章は「現在ではオーデンヴァルトと呼ばれる、ネッカー川からメイン川の間広がるゲルマニアの森」に位置する、皇帝がアインハルトに与えた所領について扱っています。ミヒャエルスベルクにあるアインハルトの領地には一つの教会を含む建物が建てられ、アインハルトはその聖堂をどの聖人に捧げるか悩んでいました。その折彼はアーヘンの宮廷で「仕事をする」ためにやってきたデウスドナという名のローマ人助祭の訪問を受けます。デウスドナがアインハルトに聖遺物を選ぶためのカタログ (*libellus*) を渡していることから、彼が実は聖遺物の仲買人であったことが分かります¹⁴。アインハルトは彼にローマにもどるための旅費をととのえ、用心のために自身の秘書ラトレイクスを同行させます。彼らはアーヘンの宮廷を経てソワソンのサン・メダール修道院に赴きました。先に述べたようにその修道院の修道院長であったヒルドゥイヌスは、先年(826年)に聖セバスティアヌスの聖遺物をローマから入手していました。ヒルドゥイヌスはデウスドナに聖ティブルティウスの聖遺物を手に入れるよう依頼します。そこで二人の旅人に、ヒルドゥイヌスの司祭の一人フヌスが加わり、三人は従者と共にローマへと急ぎました。

彼らがイタリアに着くと、ラトレイクスの従者の一人レギンバルドゥスが病に倒れ、幻視を与えられます。その中で彼はまず一人の助祭を見ます。助祭はデウスドナが約束したものではない多くの聖遺物がローマで見つかるであろうことを予言し、次にレギンバルドゥスはローマの町と聖遺物が見つかるであろう教会を見ました。ローマに着くと、一行はサン・ピエトロ・イン・ヴェンコリ教会の近くのデウスドナの家に滞在しますが、彼は言を左右にして聖遺物を渡そうとはせず、「その無能さと狡猾さ」を露わにします。それでも彼はアインハルトやヒルドゥイヌスの使者に、聖遺物を見つけるため一緒に聖人の墓を訪れようと思いつきました。しかし、彼らに警告をしたレギンバルドゥスの夢を思い出し、ラトレイクスとフヌスはデウスドナ抜きで墓を訪れようと思えます。「彼らはまず殉教者聖ティブルティウスの教会を訪れた。それは町から3000歩ほどの距離にあるラビカーナ通りに位置していた。そこで彼は殉教者の墓を仔細に観察し、人に見つかることなしにそれを開くことができるかどうか注意深く調査した。次に、彼らはこの教会に隣接する、キリストの殉教者マルケリヌスとペトルスの遺骸が埋葬された地下墓室へと降りて行った。墓の特徴を調べた後彼らは帰途に着いたが、その計画を案内主には秘密にしようと考えていた」¹⁵。

しかしその土地について完璧に知っていた案内主はそれに気づき、結局彼ら三人で夜密かに聖ティブルティウスの遺骸が収められた祭壇を開こうとし——これには失敗しますが——、聖マルケリヌスとペトルスの墓の蓋をどかそうとしました。彼らはそこから聖マルケリヌスの聖遺物を取り出すのには成功し、「遺骸の移動の痕跡が残らないような形で」蓋を元に戻しておきました。聖マルケリヌスの聖遺物はデウスドナに預けられることとなります。しかしながらラトレイクスは「共に殉教に遭い共に葬られた二人」の遺体を分かたつことを望ましく思いませんでした。それ故大いに悩んだ末、彼はギリシャ人修道士たちの助けを借りて司祭フヌスと共に再び夜間の侵入を試みます。彼らは聖ペトルスの聖遺物を入手し、聖ティブルティウスの祭壇を開けるのにはまた失敗したものの、聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物の間に見つけた他の遺灰の中にティブルティウスの聖遺物を見出しました。「ヒルドゥイヌスの司祭(フヌス)がそれを聖ティブルティウスの聖遺物として手に入れ持ち去るということが彼らの間で合意された」¹⁶。

ガリアへの道中一行と聖遺物は、王がアインハルトに下賜したパヴィアの洗礼者ヨハネの教会を訪れます。フヌスとデウスドナの兄弟ルニゾによって聖遺物はパヴィアへと運ばれたのですが、その一方ラトレイクスとデウスドナは誰も聖遺物の盗掘に気付いていないかどうか確認するために、さらに一週間ローマに留まっ

14 *Ibid.*, I, 1, p. 240, 14.

15 *Translatio...*, I, 4, p. 241, l. 29–34.

16 *Ibid.*, I, 5, p. 242, 25–26.

ていました。彼らはパヴィアで合流しますが、「ローマの聖なる教会からの」使者がやってくるということが知らされたため、パヴィアからの出発は二手に分かれました。デウスドナとフヌスは急いでソワソンへと向かいますが、彼らが持っていったはずの聖遺物についてはテキストは触れていません。ラトレイクスはローマの使節が行ってしまうのを待つと、聖遺物を伴ってサン・モーリス・ダゴヌ（現在のスイス）へと別の道を通って向かいました。彼はレマン湖の入口でローヌ河を越え、北上してアレマニアを通してゾロトゥルン（現在のスイス北西部）まで向かい、そこでアインハルトによってマーストリヒト（現在のオランダ）から派遣された使者たちと合流します。聖遺物は、パヴィアからそれを持ってきた人々やマーストリヒトからやってきた人々と共にストラスブルに華々しく入場し、ライン川を下り、ネッカー川との合流地点のちょうど北側の東岸に上陸します。そこから、「神を讃え歓喜する大群衆に伴われて」¹⁷到着したミヒャエルスベルクにおいて、この聖遺物は居場所を手に入れるのです。聖遺物はバシリカ礼拝堂に設置されますが、この礼拝堂はアインハルトが建設したもので、彼はこの礼拝堂のためにローマまで聖遺物を探しに使者を出したのでした。任務は完遂されました。

しかしながら、この聖遺物の前で祈禱を行っていた一人の聖職者が見た幻視において、聖遺物はその地に留まることを望んではいないことが知らされます。誰もこれに注意を払いませんでした。聖遺物を讃えるためにアインハルトはそれらを絹の袋に移したのですが、聖マルケリヌスの聖遺物が聖ペトルスのそれに比べて量が少ないことに気付きます。彼はマルケリヌスがペトルスに比べて小柄だったのだと推測しました（この推測が間違いであることは、この後第二書で明らかになります）。その時、それらを取る聖遺物箱の中から血のような液体が流れ出て、大きな動揺を引き起こしました。アインハルトは三日間の断食を行い、この奇蹟が何を意味するかについて神から示唆を得ようと祈りを捧げました。血は消え、聖人が他の場所に置かれることを望んでいるのだということがついに了解されました。最終的に司祭ヒルトフリドゥスの従者ロラドゥスの幻視が、アインハルトにミヒャエルスベルクからそう遠くない彼のもう一つの所領、ミュールハイムへと聖遺物を奉遷するよう説得するのに成功します。アインハルトは貧者の一団を伴い、聖遺物を持って出発しました。天候は荒れ気味でしたが、神がこの奉遷を助け、前の夜にひどい雨が降っても移動の障害となりうるような泥濘や洪水に遭うことはありませんでした。ある村に滞在した時には一人の麻痺を患った修道女の治癒が起きました。ミュールハイムに着くと、あまりに多くの群衆が押し寄せたため、はじめは聖遺物を教会へと持ち込むことができないほどでしたが、最終的に聖人の聖遺物箱は「かれらが指示した教会」に安置され、この場所が神の摂理によって選ばれたことを示すかのように奇蹟が起り、それ以降この場所はゼーリングンシュタット、すなわち「聖人の都市」と呼ばれるようになりました。828年1月17日のことです。

アインハルトはその後アーヘンの宮廷へ戻り、ここで第一書は終わっています。

結局のところ、この第一書には三つの話が含まれています。ローマでの聖遺物の発見 (*inventio*) の話、ローマからパヴィア、サン・モーリス・ダゴヌ、そしてストラスブルを経たミヒャエルスベルクへの長い奉遷の話、そしてミヒャエルスベルクからミュールハイム（ゼーリングンシュタット）への短い奉遷の話です。アインハルトはローマでの聖遺物の搜索、そして一回目の奉遷の発案者であり、二回目の奉遷は自身で行いました。献辞と序文で自身について説明してから、テキスト全体において彼は一人称で語り、「私」という呼称を用いています。彼が主導してデウスドナに命令をし、自身の秘書であるラトレイクスを同行させたの

17 *Ibid.*, I, 8, p. 243, 17–18.

です¹⁸。ローマへの旅立ちからパヴィアへの帰還までの物語全ては明らかにアインハルトから役割を引き継いだラトレイクスの証言を基礎としています。聖遺物のパヴィアへの到着以降、テキストでも示されているように、アインハルトはラトレイクスの手紙から逐一情報を得ていましたが、その後聖遺物をアレマニアにおいて迎え、ミヒヤエルスベルクまでそれを運ばせるために、当時滞在していたマーストリヒトから代表団を派遣して以降は直接に介入するようになりました¹⁹。二回目の奉遷と最終的な聖遺物のゼーリングンシュタットへの安置 (*depositio*) に関しては、彼が主な当事者となっています²⁰。

しかしここで、本書の最初と最後にアインハルトが皇帝に仕える者として現れていることに注目しておきましょう。最初の行で彼は「宮廷へ入り」、最後の行で「大いに喜んで宮廷へと戻った」のです²¹。

第二書

第二書には第一書と同様に序文がありません。アインハルトは前書と同じように一人称で話を続け、テキストの初めに宮廷にいて、最後には宮廷に戻ります。全ては828年のことです。

アーヘンの宮廷でアインハルトは修道院長ヒルドゥイヌスと再会し、聖マルケリヌスとペトルスの奉遷について語り合います。会話の中で、彼はヒルドゥイヌスが、その衣服がいかに豪華であったか語るができるほどにマルケリヌスの聖遺物についてよく知っていることに気づき、不審に思いました。ヒルドゥイヌスは次のようなことを白状させられます。聖ティブルティウスの聖遺物を探させるために彼がデウスドナとラトレイクスと共にローマへ同行させた司祭フヌスが、パヴィアへ戻る途中、聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物の一部を盗んだということです。それはフヌスが、自分の発見した聖ティブルティウスの聖遺物の質に確信が持てなかったためでした。ヒルドゥイヌスは詳細に話をし、アインハルトはこれを直接話法で書き写して（あるいは再構成して）おり、そこで彼が語ったのは、いかにして司祭がパヴィアの聖ヨハネ洗礼者教会に置かれた聖遺物を、他の同行者が寝ている中徹夜で番をしている時に、「静かに聖遺物箱の前にやって来て灯りを近づけ、印章に付いている糸を焼いて、鍵がないにもかかわらず素早く箱を開き、それぞれの聖遺物から可能であると思われる限りのものを取り出し、焼けた糸の端を無傷のままの印章に結び直し、その後誰も彼のしたことに気付かれることなく元の場所に戻って腰を下ろした」²²のかということでした。聖遺物のソワソンへの到着以降、聖遺物はサン・メダール修道院において人々の崇敬を受け、多くの信者を惹きつけました。この告白はアインハルトがあらかじめある人から聞いていた話と一致していました。アインハルトは聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物がソワソンにて群衆の崇敬を受けていることを知るのでした。これは容認できない競合関係でした。アインハルトはやっとのことでヒルドゥイヌスに聖遺物を返還するよう約束を取り付けました。

この件に関し彼は秘書ラトレイクスと、ゼーリングンシュタットにおいて聖遺物の管理を任せられていたデウスドナの兄弟ルニゾに手紙を書いて知らせます。彼らは宮廷へと急ぎ赴き、アインハルトに多くの聖遺物が盗まれたこと、それがパヴィアにおいてではなくローマのデウスドナの住居においてであり、聖ペトルスの聖遺物を探しに行く前に、つまり聖マルケリヌスの聖遺物のみが保管されていた時のことであったことを告白しました。ルニゾはヒルドゥイヌスの司祭から金を受け取り、箱の中の聖遺物を彼が取りたいだけ取るに任せたのです。アインハルトはこの話の最後にこう書いています。「これらのことはこのようにして起

18 *Ibid.*, I, 1, p. 240, 22–23.

19 *Ibid.*, I, 7, p. 242, 57–p. 243, 10.

20 *Ibid.*, I, 12–15, p. 244–245.

21 *Translatio*..., I, 1, p. 239, l. 37 : *Cum adhuc in palatio positus ac negociis saecularibus occupatus*... ; I, 15, p. 245, l. 23 : ... *ad palatium sumus cum magna exultatione regressi*.

22 *Translatio*..., II, 1, p. 245, 55–58.

こり、ルニゾは自身も上述の司祭の共犯者であったのだが、私の足元にひれ伏し泣きながら告白した」²³。

そこで聖遺物はソワソンからアーヘンへと運ばれ、まずヒルドゥイヌスの家の礼拝堂に置かれ、次に「神の聖母マリアの教会」、すなわち宮廷礼拝堂においてヒルドゥイヌスからアインハルトに手渡されます。宮廷礼拝堂からアインハルトの家の礼拝堂へ聖遺物を運ぶ際には行列が組織され、アーヘンに素晴らしい芳香が立ち込めました。この芳香に惹かれて数え切れないほどの群衆がアインハルトの住居へと急ぎました。遠方から人々が集まり、多くの奇蹟が起きました。盲人は目が見えるようになり、聾者は耳が聞こえるようになり、唾者は口がきけるようになり、麻痺症患者は自分の足で歩いて家に帰りました。皇帝自身もその妻と聖遺物を訪れ崇敬することを望みました。そのため聖遺物は宮廷礼拝堂に移され、そこでルイ敬虔帝とその妻ユードイトは聖遺物の前に平伏し、ミサに参加し、寄進を行いました。皇帝はひとつの所領を、皇妃は「3ポンドの重さがある黄金と宝石の嵌め込まれた帯」を寄進しています。

その後アーヘンからゼーリングンシュタットへの奉遷が行なわれ、ゼーリングンシュタットで聖遺物は残りの部分と一緒にになりました。この奉遷は16日間に渡って行われましたが、熱心な信者の群れが毎日入れ替わり立ち替わり付き従いました。多くの奇蹟がそれを彩っており、アインハルトはそれらが「怠慢のために沈黙の中に忘れ去られてしまうことのないように、神を讃えるのに寄与する出来事を」²⁴記録しています。目的地に到着すると、聖遺物は宝石で飾られた箱に入れられて教会の祭壇に置かれ、その後以前に持ち込まれていた聖遺物と統合されます。聖マルケリヌスと聖ペトルスがアインハルトにこれらの聖遺物を全てまとめなければならぬと知らせたのです。それは次のような話でした。祭壇上の聖遺物箱が不吉な音を立て、ある聖職者は一人の男の幻視をもたらされます。その男は聖職者に、持って来たばかりの聖遺物と前年に直接もたらされた殉教者の聖遺物を一所にまとめることなしに立ち去ることのないようアインハルトに伝えるよう命じたのです。それゆえ彼が聖遺物をまとめると、殉教者はすぐに奇蹟をとりなすことで、つまり麻痺症患者であり聾者であった一人の男の治癒によって賛同の意を示しました。その後——828年秋に——アインハルトはアーヘンの宮廷へ戻りました。第二書はここで終わっています。

この第二書はローマからゼーリングンシュタットへの聖遺物の奉遷の物語を著しく充実させ、完結させています。この書は第一書と丁寧に関連付けられています。ヒルドゥイヌスの司祭（フヌス）による聖遺物の窃盗に関する二つの物語は、第一書において描かれた出来事の経過のなかに完全に統合されます。パヴィアへの滞在、つまりフヌスとデウスドナの兄弟ルニゾが、ラトレイクスとデウスドナより一週間前に、聖遺物とともにそこに到着していたことはすでに記述されていました。フヌスとデウスドナは、ラトレイクスとルニゾよりも前に再出発しましたが、第一書からは聖遺物をもたずに発ったかのように見えます。しかしながら実際には彼らはくすねておいた聖マルケリヌスの聖遺物の一部を持っていたことが後に分かります。また、ローマにおいてマルケリヌスの聖遺物はペトルスのそれよりも前にデウスドナの家へ運ばれていたこと、アインハルトがそれを受け取り聖遺物箱に収めた時、彼はマルケリヌスの聖遺物はペトルスのそれと比べるとずっと軽いのを確認して、その体躯がより小柄であると考えていました。

この盗みによって、聖遺物の一部が1年前に聖セバスティアヌスの聖遺物を手に入れていたサン・メダール修道院に設置されることとなります。その名高い修道院長ヒルドゥイヌス（文書局長であり、サン・ドニを含む他のいくつかの修道院の修道院長）は、アインハルトの修道院を犠牲にして、ソワソンにある自身の修道院の魅力を強めたのです。しかしアインハルトによって書かれた話では、いかにして聖人がその聖遺物を他の場所ではなくこれこれの場所に置きたいという願いを表明したかについて、そしてそれらが最終的に

23 *Ibid.*, II, 2, p. 246, 39–40.

24 *Ibid.*, II, 8, p. 247, 38–39.

ゼーリングゲンシュタットに集ったことについて語られています。それぞれの奉遷において、殉教した聖人たちを通して神からもたらされた奇蹟が聖人たちの満足を示しています。

アーヘンの宮廷に関しては、第一書におけるのと同様にこの書の最初と最後においてアインハルトが滞在する普通の場所ですが、奉遷の話においてこの地は重要な地位を獲得しています。アインハルトがヒルドゥイヌスと聖なる殉教者の聖遺物の返還について交渉し、それを手に入れたのはアーヘンの宮廷においてでした。ヒルドゥイヌスがそれをはじめ自身の家に運ばせ、次いで宮廷礼拝堂でアインハルトに聖遺物を返還したのもアーヘンでした。聖遺物はここからアインハルトの家に運ばれ、その後再び宮廷付属礼拝堂に設置され、王はそこを訪れてそれらを崇敬し寄進を行ったのです。アーヘンにおいて、「神聖な芳香」を全ての人々が感じ、非常に多くの奇蹟が起きました（アインハルトは第四書で再びこれについて扱っている）。マルケリヌスとペトルスの聖遺物は「皇帝的」といえる性格を獲得したのです。

最初の二つの書は最終的にマルケリヌスとペトルスの「一度きりの」奉遷ではなく、一連の奉遷を描きだしています。聖遺物全体のローマからパヴィア（のアインハルト所有の教会）への奉遷。そこからその一部がサン・モーリス・ダゴヌ、アレマニア、ストラスブール、そしてミヒャエルスベルクへと運ばれ、ミヒャエルスベルクからゼーリングゲンシュタットへとそれらを運ぶ新たな奉遷。残りの部分は、パヴィアにおいてあるいはすでにローマで盗まれ、ソワソンへ運ばれた後アーヘンの宮廷へ、そして最後にはゼーリングゲンシュタットへと至りました。

第三書

第三書の冒頭には、第一書と第二書について確認したのとは異なり、序文があり、アインハルトがやや異なる作品の執筆を始めようとして意識していたことを示しています。奉遷は完了しました。ここでアインハルトが意図しているのは、彼が言うには「靈驗と奇蹟 *virtutes et miracula* を記録することである。それらはキリストの聖なる殉教者、マルケリヌスとペトルスが、その非常に聖なる遺骸がローマからフランキアへと移送された後、様々な土地において起こした……」²⁵。彼は読者にここで述べていく奇蹟について予告し、それらの中には時に人が物語るのを聞いたために疑問の余地の残りうるものもありましたが、アインハルト自身が目撃したことから考えて、彼はそれらが信用に足るものであると判断しました。彼は構想について予告しています。彼はまずゼーリングゲンシュタットの彼自身の修道院において見た奇蹟（それが第三書の内容です）について記し、次に「宮廷の全ての人々の前で起こった、アーヘンの宮廷における奇蹟について記す。最後に私は、敬虔な人々の求めに応じて聖遺物を運ばせた様々な土地において起こったと聞いたことについて話そう（これが第四書の内容です）」²⁶。この二つの書はアインハルトによってその前の二書の続きとして想定されていました。第一章の始めの文は明らかに第二書の最後を受けて書かれたものです。「3人の殉教者の神聖なる聖遺物が、すでに見てきたように [……] 今眠りに就いている場所に運ばれて後……」²⁷。それから起こる奇蹟がこの奉遷が神の摂理の業であることを保証するのです。

ゼーリングゲンシュタットでの奇蹟

アインハルトはここで聖遺物に関する長い話（一、二書がMGHの二つ折りの版で合わせて9頁しかないのに対し、ここでは8頁に及びます）の中で奇蹟を記していますが、われわれはここではそれらの奇蹟をそ

25 *Ibid.*, III, *praef.*, p. 248, 41–42. その最初の序文において、彼は殉教者の聖遺物の奉遷と聖遺物が起こした奇蹟 (*signis et virtutes*) について記したいという意図をはっきりと表明している。上記注13を見よ。

26 *Ibid.*, 50–55.

27 *Ibid.*, III, 1, p. 248, 56–57.

れとして分析することはしません。ただし、アインハルトが一人称でこの話を記している点に注目しておきましょう。彼は奇蹟に立ち会い、奇蹟を受けた人に聞き取りを行いその名前も記しています。彼自身が奇蹟の場面に立ち会っていない場合には、非常に信頼できる人から聞いたため、ただの「聞き手」としてではなく「自分自身で目撃した」²⁸こととしてそれらを説明することにしたと明言しています。アインハルトはそれらを記述する順序に関してはあまり重要ではないと語り、その想起された順番でそれらを記録していると説明しています。「というのもこうした話において考慮に入れなければならないのは、その日付よりも出来事とその原因なのだから」²⁹。こうした奇蹟はとりわけ治癒の奇蹟で、いずれ劣らず人目を惹くものであり、アインハルトは力を入れて詳細にそれらを記しています。そのうちの一つは、ひとりでに点った大ろうそくの灯に照らされてビールがワインに変化したというものです³⁰。

しかし第12章において、アインハルトはゼーリングンシュタットを離れ宮廷へと赴かねばならなかったことを明らかにしています（「私が前に述べたように」、すなわち第二書において言っているように）。皇帝ルイが冬のさなかに有力者の集会を召集したのです（828年）。アインハルトがアーヘンに到着してから一ヶ月後、彼は「エレンハルドゥスという名前の」従者を、ゼーリングンシュタットで起きたことを聞いてそれをすぐに報告させるために派遣しました。アインハルトは彼が報告した奇蹟を記録しています。次にラトレイクスがゼーリングンシュタットからアーヘンにやってきて、一つの「小冊子 *libellus*」を皇帝に献上するためにアインハルトのもとへ持ってきました。それにはある盲人に与えられた多くの勧告が含まれており、勧告を与えたのは大天使ガブリエルでした。ガブリエルは聖マルケリヌスの守護者として振る舞い、その姿をとって現れたのです³¹。アインハルトはラトレイクスによって詳細に記されたこの話を書き写しています。ラトレイクスがゼーリングンシュタットへと発つと、もう一つ他の「小冊子 *libellus*」がアーヘンのアインハルトのもとへ届けられました。この書にはいかにして、憑りつかれた一人の少女が聖人の恩寵によって悪魔から解放されたかについて書かれていました³²。つまり、アインハルトが直接目撃したもの、そして信頼できる情報提供者の証言によるものに、こうした彼が再録した文字による記録が加わっているのです。

その後、アインハルトは828年末のアーヘンでの二度目の滞在について言及しています。彼は12月1日にゼーリングンシュタットを発ち、ヴィースバーデンを通ります。この時聖人のとりなしによって彼の従者たちは気候上の深刻な問題を免れることができました³³。第三書において報告されている最後の奇蹟では、狂気に苛まれたある司祭がゼーリングンシュタットの聖マルケリヌスの聖遺物のもとで治癒されています。この時アーヘンから戻っていたアインハルトはこの治癒において積極的な役割を果たしており、彼はこのとき証言者であると同時に当事者でもあったのです。

記録されている全ての奇蹟はそれゆえゼーリングンシュタットの聖遺物の近くで起こったことですが、アーヘンで職務を果たす必要があったため、必ずしもアインハルトがそこに立ち会っているわけではありませんでした。彼は密使から、さらに「小冊子 *libelli*」によって情報を得ており、自分自身が目撃した奇蹟と同様の正確さでそれらを記しています。彼はゼーリングンシュタットにおいて起こった奇蹟全てを一書に集約させています。かくしてこの綿密に作られた奇蹟についての最初の書は、ゼーリングンシュタットがマルケリヌスとペトルスによって選ばれた土地であることを示しているのです。この巻は聖人たちとその聖遺物を擁する修道院、そしてもちろん神を賛美しています。しかしここで、アーヘンの宮廷がこの書においても

28 *Ibid.*, III, 6, p. 250, 13–14.

29 *Ibid.*, III, 4, p. 249, 35–36.

30 *Ibid.*, III, 11, p. 251.

31 *Ibid.*, III, 13, p. 252–253.

32 *Ibid.*, III, 14, p. 253–254.

33 *Ibid.*, III, 19, p. 255.

しばしば登場していることに注目しておきましょう。アインハルトはそこに二度滞在し、彼は宮廷において、口頭または文章によって、すでに発生したもので彼がこの本に組み入れている奇蹟譚の大部分を受け取ったのですから。

第四書

奇蹟に関するこの二つ目の書は、第三書と同じくらい分量に富んでいます（MGHの二つ折りの版で8頁）。第三書と同様、第四書にも序文があり、そこでアインハルトは「宮廷で起こり、民衆に知られただけでなく君主や有力者、宮廷全体の耳に入った」奇蹟を第一に扱っています。また彼は、それらが他の聖人の聖遺物が置かれていないアーヘンにある彼の住居の礼拝堂において起きたのだから、まさにマルケリヌスとペトルスによってもたらされた奇蹟であると説明しています³⁴。次に彼は他の聖人の聖遺物が置かれている聖地においてこれらの聖遺物が起こした奇蹟について扱っています。そのためこうした聖人全体に、奇蹟をもたらしたという功績を帰すことができるでしょう。しかし実際はそうではありませんでした。というのもアインハルトが言うには、奇蹟がその地において、マルケリヌスとペトルスの聖遺物の到来の前には起こっていないことが「明らかに証明されているのだから」。ここではアインハルトの二つの関心事が示されています。まず、宮廷で起こり、宮廷全体が証言者であるような奇蹟を伝えること。そして第二に宮廷や他の様々な聖地において奇蹟が、他の聖人ではなく、まさに聖マルケリヌスとペトルスによるものであることを記述することです。

序文で予告されたように、前半はアーヘンの宮廷で起こった奇蹟、すなわち盲人やくる病患者、麻痺や熱病の治癒によって構成されています。奇蹟の受け手は名前によって正確に特定され、また奇蹟は常に聖遺物が置かれていたアインハルトの礼拝堂において起こっていますが、それは他の治療手段が求められたが、それが無駄に終わったあとのことでした。治癒を受けた者は、時に遠方から訪れていました。これらの奇蹟のうち最後のものは、麻痺を患った少女の治癒です。奇蹟の話の後、アインハルトはいかにしてこのことを知ったかについて記しています。この話は皇帝自身から聞いたもので、皇帝はこれを司書ゲルヴァルドゥスから聞いていました。「私が来ていつものように陛下の前に立っていると、陛下は、私を含め御前にいる者全てに、ゲルヴァルドゥスがこの奇蹟について語ったことをお話し下さった……。このように、この証言から私は、われわれの家においてわれわれの知らない間に起こった奇蹟について知ったのである」³⁵。アインハルトは殉教者マルケリヌスとペトルス、宮廷、そして皇帝自身の間にある結びつきを強調しようとしているのです。

次に彼は、「修道士たちの求めに応じて私が聖なる殉教者の聖遺物をそこへ移動することを認め、そこで今に至るまでそれら聖遺物が大いなる尊敬とともに崇敬されている教会において起こった」奇蹟について扱っています。いくつかの奇蹟はヴァランシエンヌのサン・ソーヴ修道院において起こりました。最初のものはゼーリンゲンシュタットからヴァランシエンヌまでの奉遷の途中に起こり、アインハルトが文字に記した証言は、サン・ソーヴ修道院長のゲオルギウス自身の口から語られたものです³⁶。彼はそれに続く奇蹟に関して、この修道院長から「小冊子 *libellus*」を受け取ったことを明らかにし、それを書き写しています。ここから、ゲオルギウスがアインハルトに聖遺物の貸出を求めにやって来て、また20ほどの治癒の奇蹟が起こったのが、アーヘンの宮廷だったことがわかります。また、「このゲオルギウスがヴェネツィア人であり [……]、アーヘンの宮廷において、驚くべき技術をもって、ギリシア語でヒュドラウリコスと呼ばれる

34 *Translatio...*, *Praef.*, p. 256, 27–33.

35 *Ibid.*, IV, 7, p. 258, 34–35.

36 *Ibid.*, IV, 9, p. 259, 05–06.

水オルガンを制作した」³⁷こともわかります。

シント・バーフ修道院からもたらされた別の「小冊子 *libellus*」によってアインハルトは、ヘント（現在のベルギー）において、彼が貸した聖遺物によって起きた別の20ほどの奇蹟について書くことができました。三つ目の「小冊子 *libellus*」は、マーストリヒトのシント・セルウェアス修道院の修道士によってもたらされ、聖マルケリヌスの聖遺物を託したこの地において起こった奇蹟を書き記しています。アインハルトは、この書を記憶に基づいて引用している³⁸と思われます。

最後にアインハルトはゼーリングンシュタットに戻り、第四書を華麗に終わらせるための締め部分と彼が考える二つの奇蹟譚を記しています³⁹。一つは聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物の近くで、ローマの別の殉教者である聖プロトゥスと聖ヒュアキントウスの聖遺物が到来した日に起こった奇蹟であり、もう一つは、聖人祝日暦が証明するように、ローマの殉教者であり9世紀によく知られていた聖ヘルメスの命日を祝う日に起こりました。この二つの奇蹟に関しては、アインハルトが直接の証人です。

一つ目の話はローマから始まります。教皇グレゴリウス4世は827年、彼自身が治めるサン・マルコ教会に置くための聖遺物を郊外で探させることにしました。彼が聖ヘルメスの墓を開けさせようとした時、アインハルトが言うには、「そこにいたわれわれの仲間の一人が」アインハルトにそれらの聖遺物を持ち帰ろうという計画を思いつきました。彼は助祭デウスドナに会いにいきます。アインハルトはデウスドナについて「彼については第一書で話した」と喚起しています。デウスドナは金によってその番人たちから聖ヘルメスの聖遺物だけでなく、聖プロトゥスと聖ヒュアキントウスの聖遺物までも手に入れました。後者の二人の聖遺物は、ゼーリングンシュタットの聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物の近くに厳かに運ばれ、設置され、聖ヘルメスの聖遺物（もっと先のところで、指のひとつだけであるとわかります）は個人的にデウスドナからアインハルトに届けられました。プロトゥスとヒュアキントウスの聖遺物がゼーリングンシュタットへ置かれた直後から、悪魔に取りつかれた一人の文盲女性の治癒という長い過程が始まりました。その途中この悪魔はラテン語で、自分の敵はマルケリヌスとペトルスであると白状しています。この悪魔は最終的にこの不幸な女性の肉体から離れ、アインハルトはこの奇蹟が聖プロトゥスと聖ヒュアキントウスの聖遺物の到来によるものであると認めています⁴⁰。

最後の奇蹟はケルン、「ライン川沿いに位置する大司教座」の女性に関するもので、彼女は足が麻痺していました。彼女はゼーリングンシュタットへと運ばれますが、最初の訪問では治癒は起こらず、戻ってマインツの聖アルバヌスのところへと向かいました。彼女はそこで幻視を見て、治癒を受けるために聖マルケリヌスとペトルスのところへと引き返すようにと命じられます。その頃デウスドナが聖ヘルメスの指骨を持ってゼーリングンシュタットに到着し、アインハルトはそれをしかるべくして聖遺物箱に収めました。聖ヘルメスの祝日（8月28日）、女性は快復します。「この奇蹟は当然聖ヘルメスに帰せられるであろう。というのもこの奇蹟が彼の祝日に、その聖遺物の前で起きたことは明白なのだから。ただそれにもかかわらず、聖なる殉教者マルケリヌスとペトルスがこの出来事に全く関係ないということはありません。彼らの聖遺物は奇蹟が起こった教会にあるのだから」⁴¹。新しいローマの殉教者の聖遺物の霊験は、それ以前にあった聖遺物を強化し再活性化したのです。

37 *Ibid.*, IV, 11, p. 260, 16–17.

38 *Ibid.*, IV, 13, p. 261, 16 : *cuius textus, si bene recolo, in hoc modum videtur esse compositus.*

39 *Ibid.*, IV, 15, p. 262, 43–45.

40 *Ibid.*, IV, 16, p. 262–263.

41 *Ibid.*, IV, 17, p. 264, 14–18.

四書からなる『聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物奉遷』は、その始まりと同じような形で終わっていません。つまり古代の殉教者の聖遺物の発見と盗難、そしてローマからゼーリングンシュタットへの奉遷の話です。第四書の最後の二章は完璧に構成された、作品全体の総括をなしています。すなわち奉遷と奇蹟、これら奇蹟は奉遷を正当化し、聖遺物において顕現する殉教者の力を称揚し、神のもとでの聖人たちのとりなしの有効性を明示しているのです。

アインハルトは厳格さを持って執筆していたと考えることができます。彼の構想は完全に明確で、序文とテキストへの介入によって読者を導いています。彼はいつもその典拠を明らかにしています。彼自身が目撃者であった場合も、信頼できる証言者の話を記録する場合も、また書かれたテキスト (*libelli*) からそれを引いてきた場合であっても、始めから終わりまで彼は一人称で語り、模範的で正しいことを記録と記憶に託す者としての立場をとります。

またこのテキストの布置において、828～830年の危機というコンテキストと結びついた、アインハルトの二つの関心事が表出しています。そのうちの一つは、ゼーリングンシュタットに位置していながら、聖マルケリヌスとペトルスが、それらのために献身的に動いたアインハルトと同様に、どれだけ皇帝と帝国のために奉仕する立場にあるかを示すことでした。聖人はアーヘンの宮廷において多くの奇蹟を起こしており、宮廷はこのテキストにおいて一つの重要な位置を占めています。アインハルトに関しては、宮廷において卓越した人物であり、この『聖マルケリヌスとペトルスの聖遺物奉遷』において彼は神と聖人たち自身に次ぐ主要な当事者でした。この作品の制作はおそらく、王国に奉仕するための殉教者の従者たる、彼自身を弁護するためでもあったのです。

(小坂井理加・村田光司 訳)